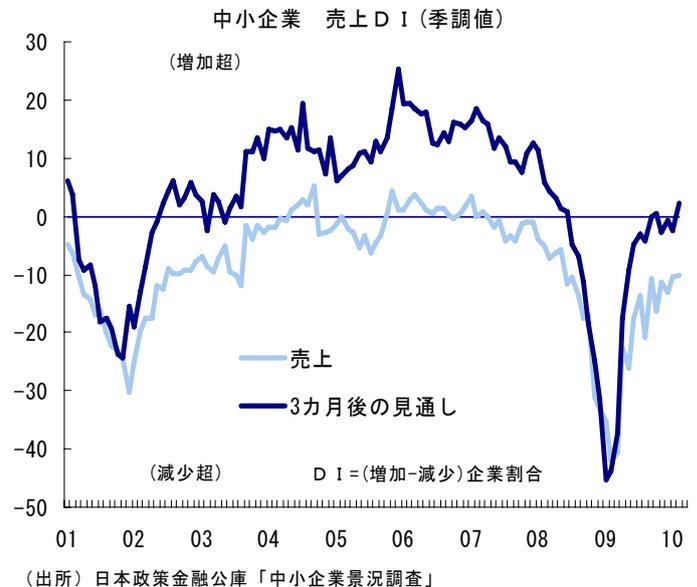
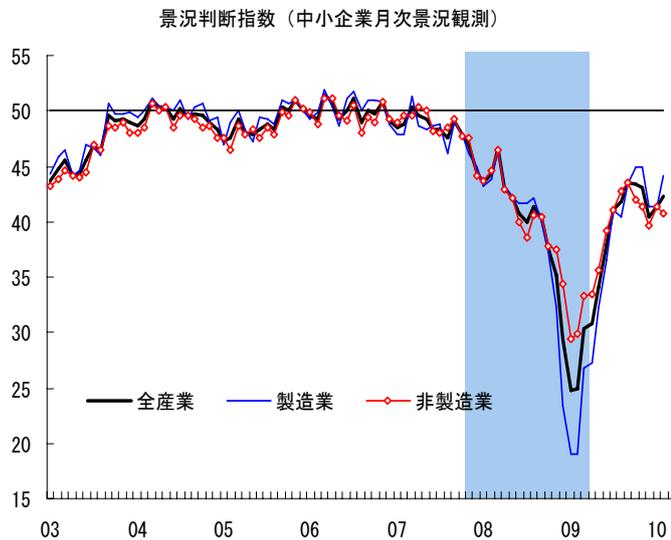


指標名: 中小企業の業況(2010年2月)

発表日2010年2月26日(金)

～改善が頭打ちとなっている状況が続く～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 岩田 陽之助
TEL : 03-5221-4525



○景況判断指数：前月差+1.0pt

商工中金から公表された2月の「中小企業月次景況観測」の景況判断指数(1000社調査)は、全産業で42.3(前月41.3)と、2ヵ月連続で小幅上昇した。もっとも、依然として「好転」「悪化」の分岐点となる50は、35ヶ月連続で下回っている。内訳をみると、製造業が44.2(前月41.3)と上昇した一方、非製造業は40.7(前月41.3)と低下した。

日本政策金融公庫から公表された「中小企業景況調査」では、2月の売上DIは▲10.2(前月▲10.5)と+0.3pt上昇した。こちらも「増加」「減少」の分岐点となる0は35ヶ月連続で下回っている。

両調査ともに回復しているものの、改善は小幅であり、趨勢的に見れば改善が頭打ちになっている状況に変化はない。

「中小企業月次景況観測」の景況判断指数を業種別に見ると、製造業については、化学を除く全ての業種で上昇した。特に、一般機械の改善幅(+6.0)の大きさが目立つ。「中小企業景況調査」の最終需要別売上高を見ても、設備投資関連は上昇傾向にあることや、本日発表された鉱工業指数の予測指数において、一般機械工業が2月は前月比+15.0%と高い伸びが見込まれていることなどからも、同業種での回復感の強まりが確認出来る。中国をはじめとした新興国で設備投資需要が回復していることに加え、企業収益や稼働率の回復を受け、国内製造業の設備投資も徐々に持ち直しつつあることが背景にあると思われる。

一方、非製造業は販売価格の低下や内需不振によって依然振るわない。「中小企業月次景況観測」の景況判断指数を見ると、小売、建設やサービスなどが低下したほか、「中小企業景況調査」の最終需要別売上高を見ても、食生活関連などの低下傾向が続いている。

先行きについて、「中小企業月次景況観測」では、3月の景況判断指数は全産業で46.4ptと上昇が見込まれ、「中小企業景況調査」の売上見通しDIを見ても、+2.2とプラス転化が見込まれている。中国を始

め世界経済の回復を背景に輸出の増加が続くことが下支えとなり、製造業を中心とした業況持ち直しが見込まれている。もっとも、中小企業には消費関連の企業が多く、内需不振の影響を受けやすい。経済対策効果が徐々に減衰していくことや物価下落による売上高減少などの影響を勘案すると、回復の足取りは弱くなる可能性がある。

○中小企業の採算が悪化傾向

「中小企業月次景況観測」の仕入れ価格D Iを見ると、2月は+1.9と「上昇」超に転じている。中国をはじめとした新興国の景気拡大に伴い、原油や鉄スクラップなど原材料価格が上昇したことが背景にあると考えられる。一方、国内の需要不振から販売価格への転嫁は進んでおらず、中小企業の採算は悪化傾向にある。「中小企業月次景況観測」の販売価格D Iは2月が▲11.4と依然低位に止まっており、同調査の採算状況を見ても2月は▲16.3と前月（▲14.7）から「悪化」超幅が拡大している。また、「全国小企業動向調査結果」の採算見通しD Iを見ると、価格支配力に乏しい零細企業において、より大きく採算が悪化していることが確認出来る。先行きも、大企業性製品の輸出主導で景気回復が予想される一方、需給ギャップの存在から物価の低下傾向は続くと思われ、大企業と中小企業の間では景況感に差がある状況が続きそうだ。

